泗水小だより

学校教育目標「自ら考え なかまと高め合う 泗水小」

泗水小学校
学校だより No3
文責 芹川博文
4月28日（金）

指導員さんの熱い思い
～ 自分で考える力を ～

「時間があれば、もっと時間をかけて教えたかばってん。」・・・２日かけて学年ごとに教室を開いていただいた菊池地域交通安全協会の皆様（下田様、佐美三様、山本様、大橋様、村上様、永瀬様）と、菊池市役所の開田様の、２日間の教室後の言葉です。

単なる「仕事」とは思えない使命感あふれる姿に、「泗水小の子どもたちは、幸せだなあ」という思いと同時に、この子どもたちに、交通事故に遭わない「自分で考える力を」と、改めて感じました。

ポイント① 横断歩道での待ち方、渡り方

車道ギリギリに立って待つのは、非常に危険です。バランスを崩して車道に出る危険性や、大型の車との接触などが予測されるからです。

また、（特に点滅状態の時に）斜めに走り込んでくる姿も見ます。交差点などは、右折車、左折車も予測されます。絶対にやめてください。

ポイント② 自転車はヘルメット着用

自転車での死亡事故では約６割が頭部に致命傷を負っているそうです。

また、ヘルメットを着用していなかった時の死亡率は、着用していた時と比べて、２倍以上高くなるということです。

４月１日から道路交通法が改正され、大人も含めてヘルメット着用が努力義務化されました。「しまった」では遅すぎます。ご家庭でも、話題にしていただければ幸いです。

泗水小ほっこり話
～「手伝ってもいいですか」～

私は朝が大好きです。児童の登校の様子を見守り、８時頃正門近くに戻ります。朝から運動場やブランコ、鉄棒で遊ぶ児童もたくさんいます。

その様子を見ながら、正門付近を高ぼうきで掃いていた時のとこです。「手伝ってもいいですすか」と声がしたので振り向くと、３年生の児童が立っていました。思いがけない言葉に、一瞬時間が止まった（音が消えた）気がしました。その後、高ぼうきを手に、その児童は一緒に落ち葉を掃いて集めてくれました。

泗水小学校には、やさしい心を行動に移せる児童がたくさんいます。「お母さんに会いたい」という１年生を励ましながら、一歩一歩立ち止まりながら登校する上級生の姿も見ました。

「手伝いましょうか」でなく、「手伝ってもいいですか」言葉の美しさにも感動した朝でした。

家庭訪問の思い出
～「草を取る母の姿」と「シュークリーム 」～

私の両親は農業を営んで、牛を養っていました。私が小学校低学年の頃は酪農で、朝と夕方は乳しぼり。起きたときは両親の姿はなく既に牛小屋。夕食も「晩ごはん」と言って遅い時間に食べていたことを思い出します。

そんな我が家にとって、家庭訪問は文字通り「一大イベント」でした。母親は２、３日前から庭の草取りをし、当日はシュークリームが「登場」しました。普段めったに食べられないシュークリームが、先生の前に出されます。「食べないで～」と見つめながら神妙に正座して時が経つのを待ち、しびれた足で玄関先まで見送ります。その後、兄と分け合って「幸せなひと時」を味わった記憶が蘇ります。（一度は、先生が忘れ物を取に来られて大慌てしたことも。）

家庭訪問、大変お世話になりました。時代とともに形は変わりますが、子どもたちにとっても温かな思い出が残ってくれればと願います。

子どもの命を守るため、大人ができること・すべきこと ～ 熊日新聞の新生面より ～

2023.4.26　新生面

△子どもはなおもひとつの希望／このような屈託の時代にあっても／／子どもはなおもひとつの喜び／あらゆる恐怖のただなかにさえ▽。谷川俊太郎さんの詩『子どもは…』の一節である▼60年ほど前の作品だが、子どもという存在の大きさ、かけがえのなさがひしひしと伝わってくる。そんな「希望」であり「喜び」である子どもが犠牲となった事件や事故の報に接すると、胸がふさがる▼2歳の双子の男児が名古屋市のマンション7階から転落死したのは先月末のこと。2人は箱を踏み台にして窓際の棚に登り、手すりを乗り越えて落ちたらしい。それまでもマンションなどからの子どもの転落事故は相次いでいた。防ぐことはできなかったのか▼と思っていたら、今度は富山県高岡市のプールで、水泳教室に参加していた5歳男児が沈んでいるのが見つかり、死亡が確認された。男児は飛び込んだ後、沈んでいく様子が監視カメラに写っており、発見まで約5分もかかっていた。腰につけていた浮具は外れていた▼現場にはコーチが4人いたが、沈んでいる男児に気付いたのは近くにいた別の子ども。さらにコーチは、プールサイドに並んで立ち、子どもたちを監視するルールを守っていなかった疑いがあるという。安全が当たり前の水泳教室で、なぜ子どもの命が失われたのか。そこに「慣れ」や「緩み」はなかったか▼谷川さんの詩には、こんな一節もある。△子どもはなおも私たちの理由／生きる理由死を賭す理由▽。そう、生きる理由なのに。